

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 6 月 18 日現在

機関番号：32690

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2009～2012

課題番号：21520551

研究課題名（和文） 機能シラバス作成のための発話機能の日中対照研究

研究課題名（英文） The Contrastive Study of Japanese-Chinese Speech Function for Functional Syllabus

研究代表者

山岡 政紀 (YAMAOKA MASAKI)

研究者番号：80220234

研究成果の概要（和文）：日本語・中国語の会話例として、映画・テレビドラマのシナリオを OCR により大量に電子テキスト化した。これに対して、李奇楠北京大学副教授の協力を得て、発話機能（依頼、陳述等）のラベリングを行い、「発話機能ラベリング付き日中会話コーパス」として、CD-ROM 化した。これを分析した結果、日中両語における発話機能の共通性が確認できた。これらの成果を発表する機関として、日本語コミュニケーション研究会を創設し、その成果を論集として発刊し、公表した。

研究成果の概要（英文）： At the beginning of this research, we had transformed scenarios in Japanese or Chinese films and TV-dramas into electric text data with OCR. Next, we labeled Speech Function (i.e. Request, Statement, etc.) on every utterance in the data with the support of Li Qinan, Associate Professor at Peking University. That was printed as J-C Conversation Corpus with Speech Function label into CD-ROM. Finally, we had confirmed, Speech Function is a feature common to both of Japanese and Chinese through this research. In addition to, we established the Conference of Japanese Communication and published the Research Papers.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	500,000	150,000	650,000
2010年度	700,000	210,000	910,000
2011年度	500,000	150,000	650,000
2012年度	700,000	210,000	910,000
年度			
総計	2,400,000	720,000	3,120,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学、日本語教育

キーワード：機能シラバス、発話機能、コミュニカティブ・アプローチ、日中対照

## 1. 研究開始当初の背景

日本語教育においてはコミュニカティブ・アプローチの普及とともに、「機能シラバス」に対する注目度が高まりつつあったが、そのためには発話の属性として《依頼》、《勧誘》、《陳述》、《質問》などの「発話機能」

の範疇群を認定する必要があった。「発話機能」とは、発話が対人的コミュニケーションにおいて果たす機能を範疇化したものであり、発話機能は様々な構文に横断的に見られる概念である。例えば、《依頼》の発話機能は、「～してほしい」「～してくれないか」「～

をお願いします」「～してちょうだい」「～してくれるとうれしい」など、多様な構文によって表現される。

この発話機能の概念それ自体は1970年代から用いられていたが、各範疇の定義や基準が不明なまま直観的に把握されていた状態であった。これに対して、厳密な定義による範疇化や、日本語における機能と形式の相関関係の明確化を、研究代表者が本研究課題に先立つ山岡(2008)『発話機能論』(くろしお出版)において考察し、発表した。

発話機能は、外国語との対照研究において有用な概念であることは当初から予想されていた。構文は個別言語ごとの相違が顕著であるのに対し、機能はかなりの程度で普遍性を有しており、対照研究の基準として適しているからである。つまり、共通の発話機能を有する発話どうしを対照させることで、両言語の表現や構文の違いを明らかにしていけると考えられたのである。

研究代表者自身もこの観点から、李奇楠北京大学副教授(研究協力者)と共同で、『依頼』や『謝罪』などに関する日本語と中国語の対照研究を行い、論考を発表してきた。ただ、現状は日本語で認定した発話機能範疇をそのまま中国語にも適用するという方式を採用していたために、中国語における発話機能認定が妥当なものであるという確証がなかった。

しかし、中上級日本語教育におけるコミュニケーション・アプローチの教材開発のためには、まさにその部分の解明が必要であった。なぜなら発話に対する機能認定は、学習者の母語と目標言語との両方の感覚において平等に妥当性が求められるものであったからだ。中国語をもとにこの普遍性が検証されたならば、他の言語に対しても同様の応用が可能と考えられた。

## 2. 研究の目的

上述のような背景のもと、本研究課題では、まず、日本語と中国語の会話文コーパスを入手することを目指した。次に、取得した会話コーパスに対して発話機能範疇の認定作業を行い、その普遍性、相違点を検証することとした。中国語を取り上げたのは、発話機能範疇は基本的に漢字熟語によって表記されており、同じく漢字表記を用いる中国語と対照することによって、概念範疇の異同が明確に把握できると考えたからである。また、中国・台湾における日本語学習者が韓国と並んで極めて多いことが、国際交流基金による海外日本語教育機関調査等でも示されており、

有用性が高いことも考慮した。

## 3. 研究の方法

日本語・中国語の会話例として映画・テレビドラマのシナリオを選んだ。シナリオを自然会話ではないが、脚本家は自然会話を意図して執筆している上に、発話状況が第三者(視聴者)によくわかるように提示されている点が、発話機能の把握において好都合であると判断した。以上の考えに基づき、映画・テレビドラマのシナリオを、大学院生アルバイトにOCR(文字認識ソフト)を用いて大量に電子テキスト化させた。その作品数は55作品にも及ぶ。

これに対して、発話機能のラベリングを行った。ラベリング作業は日本人大学院生が日本語、中国人大学院留学生が中国語のラベリングを行い、それぞれ、研究代表者山岡と研究協力者の李奇楠北京大学副教授とで校閲を行った。作業開始に当たり、発話機能の日中対照表を暫定的に作成し、実際にラベリングを行いながら、必要な修正を施す形を採った。実際の用例の一部は下記の通りである。

《 》が発話機能のラベリングである。

【中国語】「狗儿爷涅槃」より

祁永年：因为……你闷得慌。到了咱这岁数，想谁来谁就来。《陈述》(指门楼)就这么烧了？

《反问》

狗儿爷：烧。《陈述》

祁永年：放火可是犯法。《主张》

狗儿爷：我烧我儿子！《反驳》

【日本語】「瀬戸内少年野球団」より

二郎「カタイこと言うな。東京に来てても変わるのう、壮介は」《交話》

壮介「お前もな」《交話》

壮介「淡路島みんな、元気か」《報告要求》

二郎「お前とこの親父、駐在所で将棋ばかり指しとる」《報告》

壮介「(懐しく)そうか……」《感情表出》

二郎「俺、もう島へは帰らんつもりや。ボクサーになる」《意志表明》

壮介「本気か!」《問い返し》

この作業を通じて、発話機能範疇の普遍性について随時検証を行ったほか、特定の表現(と思う構文)や発話機能(禁止、質問など)について集中的に用例を集めて検証し、シンポジウムや研究会で発表報告を行い、研究者諸氏との意見交換を図った。

## 4. 研究成果

①「発話機能ラベリング付き日中会話コーパス」の作成

日中両語のシナリオ資料の電子テキスト

化、及びそれに対する発話機能ラベリング作業の成果物については「発話機能ラベリング付き日中会話コーパス」として、CD-ROM化した。なお、これの使用については、シナリオの著作権の問題をクリアしていないため、作業に関わった関係者の範囲内での使用にとどめ、対外的な配布、頒布などは控えている。

## ② 日中両語の発話機能の普遍性の確認

日中両語のコーパスに対するラベリングを付き合わせて範疇の妥当性を検証する検討会を、ラベリング担当の院生を中心に行ったのち、研究協力者である李奇楠氏との間でもたびたび行った。その結果、日中両語における発話機能の共通性・普遍性については、ほぼ確認することができた。詳細は省略する。

中国語における発話機能範疇の日中対照表は若干の修正を施したが、その異なる部分はいくまでも両言語の語彙の差異であって、概念の差異ではないと判定された。これに基づき、機能シラバス作成のための普遍的概念として発話機能が有効であることが裏付けられた。下の表は完成した発話機能範疇日中対照表の一部である。

【表】 発話機能範疇日中対照表より

日本語	中国語
《意志要求》・《意志表明》	《要求意志》・《表明意志》
《命令》・《服従》	《命令》・《服从》
《依頼》・《協力》	《请求》・《合作》
《改善要求》・《改善》	《要求改善》・《改善》
《感謝要求》・《感謝》	《要求感谢》・《感谢》
《謝罪要求》・《謝罪》	《要求道歉》・《道歉》
《挨拶》	《寒暄》
《交話》	《交谈》
《注意要求》・《注意表明》	《要求注意》・《表示注意》
《補充要求》・《補充》	《要求补充》・《补充》
《問い返し》	《反问》

また、本研究に伴って、隣接領域である配慮表現研究においては、日中両言語の相違点が徐々に明らかになってきた。例えば、日本語の《禁止》表現である「立ち入り禁止」に対応する中国語は「小草在生长 请勿打扰」（草が生えている お邪魔しないように）のような配慮表現が相違点として浮き彫りになった。このような研究成果は本研究課題から副次的に得られたものであるが、次期研究課題に引き継いで取り組んで参りたい。

## ③ 日本語コミュニケーション研究会の開催

以上の成果を発表する機関として、関連分野の科研費研究課題研究代表者であった牧原功群馬大学准教授（研究課題：日本語配慮表現の研究とその日本語教育への応用、2009-11）、小野正樹筑波大学准教授（研究課題：コミュニケーションのための日本語教育文法の構築、2009-11）と共同で「日本語コミュニケーション研究会」を創設し、本研究課題期間中に、2011年2月、2012年1月、2013年1月の3回にわたり、研究会を開催した。また、そのうちの第1回、第2回については、その成果を集約した論集第1号、第2号として、三者の科研費からの共同出資により出版した。国立国会図書館よりISSN(国際標準逐次刊行物番号)を取得し、納付を行った。広く関係分野の研究者に送付して批正を仰いでいるところである。第1号・第2号ともに新進気鋭の若手研究者12名の論考を収録している。論集第3号についても、次期研究課題に引き継いで発刊する予定で準備を進めている。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計5件)

- ① 山岡政紀・大塚望、「擬態語する」の語彙と文法機能、日語動詞及周辺研究、査読有、2009、124-134
- ② 小野正樹・山岡政紀・牧原功、「かもしれない」の談話機能について、漢日理論語言学研究、査読有、2009、26-37
- ③ 牧原功・山岡政紀・小野正樹、リソースの拡大と言語テスト、漢日理論語言学研究、査読有、2009、55-63
- ④ 山岡政紀、「と思う」構文の発話機能に関する対照研究、日本語コミュニケーション研究論集、査読無、第1号、2011、93-102
- ⑤ 山岡政紀、いわゆる疑問表現のコミュニケーション上の二面性をめぐって、日本語コミュニケーション研究論集、査読無、第2号、2012、69-78

[学会発表] (計10件)

- ① 山岡政紀、配慮表現研究の新たな潮流、北京大学外語学院招待講演、2009. 11. 27、中国・北京大学
- ② 山岡政紀、日本語言語学研究の基礎——配慮表現研究を中心に、清華大学外語学院招待講演、2009. 11. 27、中国・清華大学
- ③ 山岡政紀、配慮表現研究の意義と射程、世界日本語教育大会 2010、2010. 8. 1、台湾・国立政治大学

- ④ 山岡政紀、「と思う」構文の発話機能に関する対照研究、第1回日本語コミュニケーション研究会、2011.2.24、茨城・筑波大学
- ⑤ YAMAOKA Masaki, MAKIHARA Tsutomu, ONO Masaki, LI Qi-nan、“Contrastive Study on Speech Function of “to omow-” Structure”、Seventh International Conference on Practical Linguistics of Japanese、2011.3.4、USA、San Francisco State University
- ⑥ 山岡政紀・李奇楠、禁止表現の日中対照研究、世界日本語教育大会 2011、2011.8.21、中国・天津外国語大学
- ⑦ 山岡政紀、いわゆる疑問表現のコミュニケーション上の二面性をめぐって、第2回日本語コミュニケーション研究会、2012.1.22、茨城・筑波大学
- ⑧ 山岡政紀、配慮表現研究の地平、待遇コミュニケーション学会 2012 年春季大会招待講演、2012.4.28、東京・早稲田大学
- ⑨ 山岡政紀、日本語会話の達人を目指して、創価大学夏季大学講座講演、2012.8.26、東京・創価大学
- ⑩ 山岡政紀、文機能とアスペクトの相関をめぐる一考察——動詞テイル形の解釈をめぐって、第3回日本語コミュニケーション研究会、2013.2.1、東京・創価大学

- (2)研究分担者  
なし
- (3)連携研究者  
なし

[図書] (計2件)

- ① 張威,山岡政紀編、外研社、日語動詞及周辺研究、2009、469 (全編の編集・査読を担当)
- ② 山岡政紀、牧原功、小野正樹、明治書院、コミュニケーションと配慮表現～日本語用論入門、2010、1-36, 67-212, 233-249

[産業財産権]

- 出願状況 (計0件)
- 取得状況 (計0件)

[その他]

ホームページ等  
 日本語コミュニケーション研究論集第1号  
<http://www.succ.soka.ac.jp/~myamaoka/J-communication1.htm>  
 日本語コミュニケーション研究論集第2号  
<http://www.succ.soka.ac.jp/~myamaoka/J-communication2.htm>

6. 研究組織

(1)研究代表者

山岡 政紀 (YAMAOKA MASAKI)  
 創価大学・文学部・教授  
 研究者番号：80220234